

国際会議 ICCOPT 2016 Tokyo 開催の経験と教訓 (1)



—総務担当より—

村松 正和 (電気通信大学)

1. ICCOPT 2013

2013年7月29日、リスボンの空は青く晴れ渡り、日差しは強いものの乾燥している風が吹いて気持ちが悪かった。朝早く、私は国際会議 International Conference on Continuous Optimization (ICCOPT) の Opening Ceremony に出席していた。

Universidade Nova de Lisboa の広いセレモニー会場に次々人が入ってきた。まず荷物を座席に置いておくことができなくなり、やがて空いている座席がなくなると立ち見が出て、さらにそれも厳しくなり、部屋を出て行く人が続出した。そのときはまだ、今回の ICCOPT に立候補した都市がいくつかあり、東京はその一つであった。もしやることになったらこんなにも大勢の人が来るのか、と感慨にふけていたら、Opening の最後に、今回の ICCOPT は東京で行われることがさらにと発表された。

その数カ月前、私は水野先生から「2016年の ICCOPT を東京で開催する Proposal を出さないか、という話があるんだけど、どう思うか」という相談を受けていた。ICCOPT といえば、3年に一度開催される Mathematical Optimization Society (MOS) 主催の大きな国際会議である。水野先生としては、私を含め数人の先生に打診し、サポートが得られるようならば挑戦してみよう、というおつもりだったかと拝察する。

日本で開催された MOS 主催の国際会議は、1988年東京で開催された International Symposium on Mathematical Programming (ISMP) まで遡る¹。伊理正夫先生が組織委員長をされたその ISMP に関しては、実行委員長をされた今野浩先生がさまざまな記録を書いているほか (たとえば [1])、いくつか漏れ聞いていることがある。その中で、特に今野先生の「その後の日本における最適化研究の広がり」に大きな

¹ そのとき自分は学部生で、そういう会議が東京で開催されていたことすら知らなかった。

役割を果たした」というご意見が記憶に残っていた。なぜかという、その4年後私が初めて最適化の研究に触れたときに、「この分野の若手研究者たちは直接世界を相手にしているな」と感じたからである。偉い先生を通して世界を感じるのではなく、直接、というところが重要である。その後話を聞いて、それはやはり1988年の ISMP の影響なのだ、と思い当たった。

その ISMP からすでに四半世紀が過ぎていた。その間、OR 関係に限っても重要な国際会議が多く日本で開催されたが、MOS 主催の会議は一度もなかった。伊理先生も今野先生も後輩のわれわれを歯がゆい思いで見られるのではなからうか。やはり今、東京でもう一度大きな国際会議をやるべきなんじゃないか。実際に開催するのは大変かもしれないけれども、若い人たちに大きな影響を与え、それが日本におけるこの分野の今後の進展につながるんじゃないか、などとつらつら考えていたら自然に気持ちは固まった。その場で水野先生に「やりましょう」と答えた。

いよいよ開催することになったので、リスボンでは会議運営をつぶさに観察した。今まで、「表」すなわち参加したり研究発表したりということは何度もやってきたが、「裏」つまり運営の視点から国際会議を見たことはほとんどなかった。

ICCOPT 2013 で特に注意しなければ、と思ったのは以下のことであった。

1. ランチがすべて出ること

これは ICCOPT のよき伝統で、ランチを皆が自由な雰囲気の中で食べることで交流を増やす、という目的があるそうである。十分な量のおいしいランチであった。

2. ボトルの水がいつもテーブルに置いてあること

リスボンは海に面しているが、実はかなり空気は乾燥しており、喉がすぐに乾く。実際、脱水症状で倒れて医務室のお世話になる人もいた。ICCOPT 2016 の日程は暑い暑い東京の8月であ

るので、同様の暑さ対策を考えたほうがよいかと思った。

3. ロゴは意外に重要であること

入り口、受付などにあるのはもちろん、ブックレット、バッグ、案内板など、いろいろなところでロゴが使われる。リスボンのICCOPTのロゴは明るい色でセンスがよく、目を引いた。

4. Summer Schoolに学生がたくさんくること

Summer SchoolはICCOPTの大きな特徴の一つである。ここでは2日間、1日一つのテーマで、4人の講師が講義を行う。若い人が100名近く来ていたと思う。

5. ポスター発表はあまり人が来ないこと

口頭発表が基本で、ポスター発表はあるにはあったが、くると見回したら終わり、という程度であった。ICCOPTは伝統的にOrganized Sessionが多い会議であることがわかった。

6. バンケットは難しいこと

バンケットは18世紀に建てられた雰囲気あるお屋敷で行われた。ただし、屋敷の中だけではテーブルが足りず、庭にまで席が作られていた。庭の席に回された私には、屋敷の中がどうなっているのか全く不明で、バンケットの最中に行われたBest Paper Prize Winnerの発表も、いつあったのかさえわからなかった。

2. 立ち上げと基本方針

リスボンから帰国して少し経った2013年8月20日、ICCOPT 2016の実行に関する最初の会議が開催された。そこで以下のことが確認された。

水野先生をChairとするOrganizing Committee(組織委員会)は偉い先生たちが名を連ねており、実際の裏方の仕事は主にLocal Organizing Committee(実行委員会)が担う。実行委員会は水野先生と土谷先生がCo-chairとなり²、若い人たちをまとめることになった。ただし、そのメンバーのみでは人数的に厳しいし、たとえば寄付をお願いするなどベテランの先生でないと務まらない役目もあるので、組織委員会のメンバーの何人かに直接協力をお願いし、彼らを合わせて実行ワーキンググループ(実行WG)として機能させることにした。これ以降、実行WGが主体となってICCOPT開催に向けて動いていった。

² その後、私もCo-chairにさせていただき、3人体制となった。

当初は2カ月に1回程度の頻度で実行WG会議を開催し、いろいろな基本方針を決めていった。

まず、実行WGの中に総務小委員会、広報小委員会、プログラム小委員会など、3名程度から構成される小委員会を作成し、その長を決めた。仕事は小委員会に割り振り、小委員会が責任をもって仕事をする事となった。

私は総務小委員会のトップを仰せつかった。総務は要するに「何でも屋」であり、ほかの小委員会でやらない仕事をやるか、あるいはそういう仕事を小委員会に割り振る、という役目である。また、実行WG会議の議事進行は私が中心になって進めることになった。

メインの会場を政策研究大学院大学(GRIPS)とすることは、企画段階で決まっていた。六本木という最先端の街の魅力で、多数の研究者を呼び寄せたいと願っていたし、土谷先生、諸星先生という強力なメンバーが実行WGにいたので、やりやすいという目論見もあった。

Summer Schoolの会場に関しては、吉瀬先生から代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター(NYC)がよいのではないかというお話があった。NYCはホールのほかに宿泊施設もあり、うまく予約できれば格安で借りることができる。こうして借りた部屋を(主に学生たちに)貸し出すことで、予算の少ない学生たちを援助しようという計画も立てた。学生に対して補助を出すのもICCOPTの伝統である。従来は選ばれた数名に対して旅費の補助を出していたらしいが、今回はこの格安の宿泊施設の提供に加え、「Summer Schoolの期間中のNYC宿泊料免除」という形で、広く薄く補助を行った。NYC担当は吉瀬先生にお願いし、スムーズに予約できるように2年前から研究室合宿に行くなど、尽力していただいた。

プレナリ講演者、セミプレナリ講演者、およびサマースクール講師には、武田先生がJTBと交渉し、六本木のホテルの部屋を借りて提供した。VIPとの連絡も武田先生に対応していただいた。なお、JTBにはその後もいろいろお世話になった。具体的には、ICCOPT向けの宿泊施設紹介サイトを作っていたり、当日受付で助けていただいたりした。

今回のICCOPTでは、従来と異なり、ランチを提供しないこととした。会場が六本木なので、近くにくらでもおしゃれなレストランがある。そちらでさまざまな好きなものを食べたほうがよいだろう、という考えで積極的に「ランチを提供しない」という決断を

した。

ウェブページを作る際、東京でやることを強調しなかったもので、<http://www.iccopt2016.tokyo/>というドメインをとった。トップドメインが.tokyoというのは少し珍しいと思う。ウェブページ自体は電気通信大学の情報基盤センターと相談し、無料で大学に置かせていただいた。そのため、ページ管理は高橋先生に集中することになった。

企業寄付に関しては、早い段階から企画書を作成し、いろいろなところへそれを送りお願いした。必要と思われるところへは水野先生、矢部先生らが直接行って働きかけをした。その甲斐あり、株式会社NTTデータ数理システム様、飛島コンテナ埠頭株式会社様、システム計画研究所／ISP様、三菱重工グループ様、株式会社オージス総研様、構造計画研究所様からご寄付をいただいた。これらの寄付金は大会運営の大変な助けとなった。この場を借りて厚くお礼を申し上げる。

また日本OR学会からもまとまった額のseed moneyをご協力いただいた。ほかの収入がない初期段階で必要な経費をそこから支払うことができたので、これは非常に助かった。ほかにもなにかと学会および学会事務局にはお世話になった。改めてここでお礼を申し上げる。なお、最終的には幸いながら後述のように参加費が伸びて実質的に黒字となったので、このseed moneyは全額学会へ返却することができた。

3. 業者との関係

国際会議の運営は大変な仕事であるが、資金が潤沢であれば、その仕事のほとんどを業者をお願いすることができる。2013年の時点で、学会からseed moneyを調達する約束は取り付けていたが企業寄付はまだほとんどない状況で、いったいどのくらいの予算としたらよいのか、皆目見当がつかなかった。

特に一番大切な要素である参加者数について、予測することは大変難しかった。2016年に連続最適化の研究がどうなっているのかもわからないし、為替や世界情勢も参加者人数に大きな影響を与える。リスボンのICCOPTが400人程度と言われていたが、それより多いのか少ないのか、とりあえず、400人という目安を立て、それより少ない可能性もある、というイメージで作戦を立てることにした。

資金が潤沢でないので、業者をお願いできる仕事は一部となった。それでも、以下のような多様なものを業者をお願いした³。

- ・ロゴの作成
- ・ウェブページ（情報を提示する部分）の作成
- ・ウェブシステム（参加登録、アブストラクト登録、カード決済などをやる部分）の作成
- ・ポスター、フライヤーの作成、印刷
- ・ブックレット（プログラム冊子）の作成、印刷
- ・名札、レシートの発行
- ・バッグその他のgoodsの製造・調達

まずロゴに関しては、OR学会でもお世話になっているA社をパートナーとしてお願いした。いくつかの候補をもとに改変をお願いし、最終的に実行WGの皆の投票を経てロゴが決定したのは2014年12月3日のことであった。青い文字でICCOPTとあるが一つだけ、3文字目のCだけ赤でしかもズレているのが特徴的である。個人的にはかなり気に入った。

ポスターの作成（2015年6月19日に最終決定）もA社に行っていた。A社は大変仕事の質がよく、ポスターも満足のいくものができた⁴。

しかし、投稿登録システム（クレジットカード決済システムを含む）に関して見積もりを取ったとき、迷うことになった。かなり高額だったうえ、見積もりが「きちんとパーツに分かれた見積もりがないどんぶり勘定」という印象があった。いろいろ経験した今になれば、細かく経費が分かれた見積もりはウェブシステムの場合できないとわかるのだが、その頃はそれを理解できず、しかも以降全部のシステム込み込みでの契約を迫られたので、ちょっと気持ちが引けてしまった。

そんな折、当時東工大に出入りしていたB社に新たに見積もりを取ったところ、より安い見積もりを出してきたこと、ウェブの一部だけ、ブックレットだけ、名札だけ、などと分けて契約できること、また私自身、担当者で面談してよい方たちかと思われたので、ここでA社とのお付き合いをやめてB社をお願いすることになった。2015年3月、ICCOPTまで1年半を切った頃のことであった。

³ これらはすべて、開催前の準備に関係するものである。期間中はバンケット、コーヒーブレイク、Welcome Reception、受付のカード決済機能、ポスターボードやガイドポールのレンタルなどを業者に頼んでいる。

⁴ 余談であるが、ICCOPT 2016のポスターに使われている政策研究大学院大学のビルの写真は、私が撮ったものである。何の気なしに資料用としてiPadで撮影したのであるが、よい時期だったせいか、結構うまく撮れているかと思う。

4. ウェブサイトの構築

B社にはまず、ウェブページのデザインをお願いした。ロゴはA社のものを用い、日の丸をモチーフにあしらい、東京の画像が動くという、なかなかセンスのよいページであると思う。こちらがつけた細かい注文にも、快く対応してくれた。これに勇気を得て、投稿・登録システムについてもお願いすることになった。

ICCOPTでは、発表の一番大きい単位はクラスタである。全体が15程度のクラスタに分かれており、それぞれのクラスタにクラスタ・チェアが2名いる。彼らがいろいろな人に声をかけてOrganized Sessionを作成してもらう。オーガナイザはいろいろな人に声をかけて3講演を一つのセッションとしてオーガナイズする、という仕組みになっている。それを踏まえて、アブストラクトの登録をどうするのかについては実行WGメンバーの間でよく話し合っていた。

最初に考えたのは、全部ウェブベースで登録を行う案である。つまり

1. クラスタ・チェアが自分でウェブにオーガナイザを登録して招待する
2. 招待されたオーガナイザはウェブ上に自分のセッションを作ってそこに講演者を招待する
3. 講演者はそこで自分の講演を登録する

というシステムである。このようなシステムだと、われわれが登録に際して行うことはほとんどなく、しかもクラスタチェアはオーガナイザを、各オーガナイザは自分のセッションの講演者を完全にコントロールできるので理想的である。

ところが、そこまでやると機能が複雑で、かなり値段が高くなってしまう。この時期になってもなお、全く参加人数が読めないことが足枷になり、緊縮予算で進行していた。本当にお金がなければ、最悪メールベースで全部手動で登録するしかないね、という話まで出ており、機能をだいぶ切らなければならなかった。いろいろ議論した末、上記の1と2は手動で行い、講演申込はウェブを通して行うシステムをお願いすることにした。

2015年の終わりから2016年にかけては、登録・投稿システム（ICCOPT Web Systemと名付けられた）の内容の検討、依頼、そしてテストにかなりの時間を費やした。Privacy Policyを書き、さまざまなタイプの登録に対応し、オーガナイズドセッションの登録にはパスワードを用いることとし、ICCOPTで用意し

た代々木オリンピックセンターの宿泊の処理も適切にできるようにした。具体的にはICCOPT Web Systemは以下の機能をもっている。

- ・アブストラクト申し込み（Organized, Contributed, Posterに対応）
- ・参加登録&カード決済
- ・バンケット購入&カード決済
- ・宿泊予約&カード決済

また、このシステムを使うために、ユーザーはまず自分のメールアドレスを登録し、パスワードを用いるようにした。それを用いて、アブストラクトの変更やバンケットの追加購入もできるようにした。

ICCOPT Web Systemは2月17日にオープン予定であった。その数日前にはロジックの検査が終わり、部分的に英語の表現が気に入らないところはあるものの、正しくは動くだろうと信じていた。さらに、セッション・オーガナイザ全員に個別にセッションのパスワードをメールで送り、「来週にはウェブシステムがオープンする予定です」と告知していた。

ところが前日になって、B社から「クレジット決済会社に申請を忘れていた」という報告があった。もちろんクレジットカード決済をウェブページで行うためのテストもいろいろやっていたが、それらはすべて「テスト環境」というところで行っており、当日に本番の環境に移行する予定だった。しかし、申請をしていないので本番環境への移行ができない、つまり、カード決済ができない、というのである。

あまりに初歩的なミスに私は激怒したが、いくら怒っても結局どうにもならない。至急オーガナイザ全員にオープンが遅れる旨のメールを送り、ウェブに謝りのメッセージを掲載し、一方で決済会社に審査申請した。クレジット決済の審査は与信審査であるので時間がかかった。いつまで審査に時間がかかるのか読めないで、ここまで遅れるとどういう不具合が起きる、どの締切を延長しなければならぬ、といった暗いことを水野先生、土谷先生と話し合った。万一審査に落ちたら、ということももちろん考えた。普段は楽天的な性格の私も、ここから審査が終わるまでの期間は胃が痛くなる思いであった。この間、水野先生、土谷先生には終始励ましをいただいたことはありがたかった。

結局ほぼ1カ月遅れて、ICCOPT Web Systemは3月19日にオープンした。

5. ビザ取得への対応

ICCOPT Web Systemがオープンすると、次々とアブストラクトの投稿、参加登録、宿泊予約などがなされるようになった。

その頃から多くなったメールの問い合わせが、ビザ取得のための招待状に関するものである。これについては、

参加費を支払った人のみに招待状を発行する

ことを基本方針とした。会議に関係ない人が簡単にビザを取得することを防ぐためである。

そのため、ビザに関する問い合わせがくると、まずその人が参加登録をしているかどうかを確認し、もし登録されていなければ先に参加登録するよう促し、登録されていればその旨を水野先生の秘書にメールで書いて送る、ということが私の新たな日課になった。

水野先生の秘書は向こうの人とメールのやり取りを行い、

1. 招待状／招聘理由書／(水野先生の) 在職証明書のうち、どこまで必要か (左のほうから必要性が高い)
2. 原本送付か、pdfを電子的に送ればよいか、を判別し、対応にあたった。

ここでもいくつかトラブルがあった。中でも、なぜかわからないが中国の郵便事情は非常に悪く、招待状が正しく到着しない、ということが多数発生した。「招待状がつかないぞ」というメールをいただいたときには、再度送付したり、最終的にはEMSを使ったりした。ほかの国ではそういうことはなかった。結局、招待状の作成総数は132枚、そのうち原本を送付した数は80枚に上った。

なんとなく怪しい人から「ビザが欲しいので招待状を送ってほしい」というメールもいくつか来た。そういう人には「参加登録をまずしてください」と返信すると、その後メールが来ることはほとんどなかった。

1件だけ、アフリカの某国から「参加登録をしたので招待状を送ってください」というメールが来たことがあった。調べてみると、確かに学生として参加登録を済ませている。インターネットで調べると、所属大学は確かに存在するが、最適化関係の研究をしている学部はないし、本人が研究発表をするわけでもない。何回かメールのやりとりをして確認したが、やりとりするたびに怪しさが募り、これは招待状は出してはいけない、と確信した。結局、この人が使用したクレ

ジットカードに不正使用の疑いがあることがわかった。そこでカードを通して返金し、先方には「招待状を送るわけにはいきません。料金はお返しします」というメールを送った。その後連絡は来なくなった。

6. 物品の調達

多くの国際会議と同様、ICCOPTでもロゴ入りのバッグを作成し、その中にブックレットと参加証明書の入った封筒を入れることにした。またさらに以下のものも準備して入れた。

1. 名札兼レシート、そのホルダーとヒモ
2. ノートとボールペン (こすると消えるもの)
3. うちわ
4. 手ぬぐい
5. 観光情報

これらは主に総務小委員の福田先生がインターネットやB社を相手に見積もりを取り、納期を確認するなどして調達してくれた。すべて800個である。

うちわは竹を骨組にし、表は8種類の絵柄があり裏にはICCOPTのロゴが入ったものである。手ぬぐいもロゴ入りを製作した。暑い夏だし、どちらも日本的だと思って自信をもって作ったのだが、どうも外国人には使い方がわからない様子で、両方ともあまり使われていなかった印象である。

東京の観光情報に関しては、東京観光財団が無料で英語版を提供してくれるのでこれを利用した。

バッグにこれらの物品を入れるのは、NYCが始まる3日前にアルバイトと実行WGメンバー有志がGRIPSの会議室で行った。薄いバッグでも物を入れて800個集まると恐ろしい量になった。

7. プログラム

プログラム作成はプログラム小委員会の仕事である。これはもちろん部屋の割り振りも含むため、会場のことをよく知らなければならない。またブックレットの作成の大きな部分を含んでいる。

当初の計画は、講演アブストラクトの締切が4月15日、それからプログラムを5月中旬までに作成、Program Committeeの了解を得て6月中旬にはプログラムを公開する、というものであった。しかしウェブの講演受付開始が遅れたため、締切を4月23日に伸ばした。もちろんこれはプログラム委員会の仕事を圧迫したが、その後の様子を見るに、この遅れはささいな話だったように思われる。

それよりもプログラム小委員の仕事を増やしたのは、

参加登録 (=参加費の支払い) をしていない
人の講演はプログラムに載せない

という基本方針だった。これはプログラムに自分の名前だけ載せて、それを業績として申告し、実は来ないし発表もしない、という悪質な行為を防ぐための方針である。ところがこれを厳密に適用すると、講演者の参加登録の締切である5月31日を過ぎないと講演が確定しない。早めにプロトタイプを作成し、参加登録していない講演者に6月以降個別対応したようであるが、これがプログラム作成者に過大な負担をかける原因になってしまったと推察している。

5・6月のプログラム小委員会の様子は、ものすごい量のメールが飛び交い、傍から見ていて本当に大変そうだった。プログラム作成を担当されたプログラム小委員会のメンバー、特にトップの後藤先生に関しては、遂行能力が高いのはもちろんのこと、完璧を求める意思の強さは本当にすごいと感じた。あまりにメールの量が多く、「もうちょっと仕事の量を減らしたほうがよいのでは」と思うほどであった。

ブックレットの作成は土谷先生がB社との対応などをしてくれて、後藤先生と土谷先生が主役となって作成された。おかげで素晴らしい、センスのあるブックレットになったと思う。

これらのことについては、後で後藤先生および土谷先生からより詳しい報告があるはずなので期待されたい。

8. NYC

Summer Schoolは代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター (NYC) で開催された。また、「学生向けに安い宿泊を提供したい」ということで、やはりNYCの部屋をいくつか借り、ウェブを通して学生たちに1泊2,200円で提供した。

NYCの部屋にはトイレや冷蔵庫はないが、エアコンはある。それだけならよいのだが、残念なことに設備が古くてインターネットが通じていない。そこでポケットWi-Fiを多数、ICCOPTの期間だけ借り、無料で提供した。Summer Schoolの会場でもこのWi-Fiを10台ほどおき、インターネット環境を提供した。

Summer Schoolの会場では、休み時間にコーヒーなどの飲み物と甘いものを出した。また、バンケットも行った。これらのことはすべて吉瀬先生にご担当いただいた。後ほど吉瀬先生からNYCとサマースクールに関して詳しい報告がなされる予定である。

一つ記憶に残っているのは、アイスコーヒーに衝撃を受けた人が多かったことである。夏なのでアイスコーヒーを準備したのだが、アメリカやヨーロッパでは一般的ではないようで、「コーヒーと書いてあるのに冷たいのはどういうことか」「日本では冷たいコーヒーを飲むのか?」という質問をかなりたくさん受けた。どうもアイスコーヒーは日本独特の飲み物のようなものである。

9. GRIPS

ICCOPTのメイン会場であるGRIPSは、あまりに講演申込が多かったため、部屋数が足りるか足りないか、ギリギリとなった。通常の会議であれば、締切近くなったときに改めてリマインドを出すのであろうが、途中から一切宣伝をしないことにした。それで、GRIPSの隣にある国立新美術館の会議室を借りることにした。会議室としては二つ、セミプレナリ講演を行う部屋として一つと、数は少ないがさすがに綺麗な部屋で、設備も整っている。会場を出るとすぐに高級ブラッセリーがあり、セレブ感が漂っていた。

しかし、申し込んだものの6月にならないと本当に借りられるかどうかかわからない。結局は、その後講演辞退がいくつか出て、プログラム小委員会に人数の欠けたセッションをいくつかまとめる、という作業を地道にやっていただいたため（ここでもプログラム小委員の仕事を増やしてしまった）、GRIPSだけでも足りる量にはなったのであるが、そのときは本当にギリギリと思っていたので、6月にこれらの部屋を借りられたときにはホッとした。

GRIPS会場については後ほど諸星先生および土谷先生から報告がある。

10. 受付

およそ650名の参加者がICCOPTに来ることが確定し、受付をどう設営するかが問題になった。特に、Conference初日のOpening Ceremonyの直前に、人が大挙して押し寄せることが予想され、それをどう捌くのか、ORの手腕が問われることになった。

650人が一斉に来たのではどうしようもないが、幸い、Summer Schoolがあるので、そこで100人から150人程度は受付を済ませることが予測される。そこに加えて、Welcome Receptionが前日にあるので、ここで50人くらい来ると予想した。それでもなお、450名残っている。

例年のOR学会の研究発表会では、参加者の名前の先頭のあいうえお順で窓口を分けていて、それで問題はない。しかし、人数が多くなるとこの方法はあまりうまくい方法とは言えない。海外の大規模国際会議に参加したとき、名前の最初のアファベット順で窓口が決まっていることがあるが、そういう場合にあまりに行列が長すぎてどこに並んでよいかわからなかったり、トラブルが起きて全く動かない列があるのに一方では空いている窓口があったり、という経験が私にはあった。

そこでわれわれは、いわゆるフォーク式で受付をすることにした。参加者は以下の順番で受付されることになる。

1. まずテーブルで自分の名前を専用の書式に書く。
2. それを手に、列に並ぶ(列は一つのみ)。
3. 自分の順番が来たら、それをデスクに出す(デスクは横に長く、数名のアルバイトが待っている)。
4. アルバイトからバッグ(うちわなどのアメニティが入っている)と封筒(名札、領収書などが入っている)を受け取り、退出する。
5. 退出した場所にはバッグと封筒の中身を書いたポスターがあるので、そこで中身を確認する。

アルバイトは、名前を書いた書式を受け取ったら、封筒置き場へ行き、その名前の封筒を取り出し、書式は箱に入れる。テーブルに戻り、テーブルの下にしまっているバッグと封筒とを参加者に渡す。

この方式でざっと計算してみた。

- ・紙を受け取り、封筒を見つけ出し、デスクに帰るまで30秒あれば余裕でできる。
- ・アルバイトが6名でやれば、1分で12名。30分で360名処理できる。7名ならば420名。

30分の間に450名全員が来るわけではないので、これならばなんとかなる、という感触が得られた。

Welcome Receptionにも力を入れた。結構上質な食事を用意してもらい、そのことをOR学会のメーリングリストを使って宣伝した。結果は上々で、確か前日のレセプションまでで250名くらい受付してくれたと記憶している。結局、初日に来たのは250名くらいで、楽々こなすことができた。

実際の受付の設営および会場設営には、水谷先生率いるアルバイトたちに活躍してもらった。アルバイトをまとめ上げた水谷先生、受付でトラブル処理に奔走していただいた高橋先生には会期期間前から後まで、大変お世話になった。アルバイトのまとめ上げに関しては、後ほど水谷先生から報告がある。

11. バンケット

バンケットについては伊藤聡先生が担当であるが、私や土谷先生もこういうイベントは大好きなので、かなり積極的に発言した。

特に今回のバンケットに関しては、Steering Committee MemberのJ. S. Pang先生からあらかじめ「1988年ISMPのようなことのないように」という特別の注文をいただいていた。先に述べたように、この年東京で開催されたISMPは大成功を収めたのであるが、たった1点、バンケットだけは不名誉な話が語り継がれている。話は単純で、高級な料理で量が少なかつたうえに立食形式だったので「ほとんど食べられない人が続出した」のである。たいしたことはないと思われるかもしれないが、まさに食物のうらみは恐ろしく、世界中にこのときのことを覚えている研究者がいるのである。ICCOPTを東京で開催することが決まってから、何人かの研究者に「バンケットは大丈夫か」と真面目な顔で聞かれた。

そこでわれわれが選んだのは激安居酒屋を借りきることだった。六本木に私と土谷先生がときどき行く「まっちゃん」という激安居酒屋がある。普段飲みに行ってもなかなか一人3,000円を超えないその店で、一人8,000円でお願ひすることにした。高級感はいくらもないけれども、とにかく量だけはたくさんあって心配がない。しかも実は、いかにも日本的な居酒屋であり、外国人は喜びそうである。

ただ困ったことに、その店はしょっちゅう店長が予告なしに交代するのである。話の引き継ぎがうまくいかないことを恐れるのと同時に、「まさかつぶれたりしないだろうな…」ということで、最後の半年くらいは実行WGの会議の後ほぼ毎回、そこへ「偵察」と称して飲みに行った。

その甲斐あり、バンケットは非常に評判がよかった。料理は刺身、寿司、牛鍋、唐揚げなど日本的でありながら十分な量があった。日本酒の樽酒やわさび巻といったアトラクシヨンの要素も提供した。その結果、多くの海外からの研究者から、「楽しかった」「おいしかった」と感想をいただいた⁵。Pang先生からも個人的に「素晴らしいバンケットだった」とお褒めの言葉をいただいた。とりえず過去の汚名をそそぐことが

⁵ 日本人には「ビール190円」というような宣伝文句が読めてしまうので、「なぜこんな激安居酒屋に8,000円も払うのか…」という声もあった。

でき、ホッとした。

なお、より詳しいことは伊藤先生から報告が予定されているので参照してほしい。

12. おわりに

裏方に徹しようかとも思ったのだが、結局自分で研究発表もしたし、講演もかなり聞いた。いわゆる「表」のほうも堪能してしまった。たくさんの研究者がハイクオリティな発表を行っており、プレナリ講演やセミプレナリ講演も大いに刺激になった。海外からの友人といろいろ話し合い、研究のこと、近況、そのほかの情報を交換できた。こういう場を600人を超える方々に安定して提供することができたという点で、今回のICCOPTは大成功だったと改めて感じた。それを支えてくれた実行WGのメンバーに心から感謝したい。彼ら一人ひとりがそれぞれにもつ並外れた能力を発揮してくれたおかげで、ICCOPTの運営は大きなトラブルなく成功した⁶。実行WGメンバーと主な役割を表1に掲げておく。紙幅の都合上役割は一つしか書いていないが、実際には多岐にわたっていたことは忘れないでほしい。

実は発足時には藤澤克樹先生が広報小委員長であったが、その後藤澤先生が九州大学へ転勤されたため、

表1 ICCOPT 2016 実行WG メンバー

水野真治 土谷 隆 村松正和 伊藤 聡 後藤順哉 中田和秀 諸星穂積 矢部 博 山下 真 吉瀬章子 奥野貴之 北原知就 高野祐一 高橋里司 武田朗子 福田光浩 成島康史 水谷友彦	実行委員長 GRIPS会場ほか 総務小委員長 パンケット プログラム小委員長 広報小委員長 GRIPS会場 渉外小委員長 会計小委員長 NYC夏学校、宿泊 プログラム 会計 プログラム 総務（ウェブ、受付） 総務（VIP対応） 総務（グッズ調達） 渉外（寄付） 総務（アルバイト担当）
田中未来 Bruno F. Lourenço 中務佑治	Student Social ブックレット作成 Openingでの司会

⁶ 今回ICCOPTの唯一の大きなトラブルは、私の担当したICCOPT Web Systemのオープンの1カ月の遅れである。自らの能力の至らなさを感じる。

活動が本格化する前に中田先生に交代した。しかし結局、藤澤先生には（日本から唯一人の）セミプレナリ講演者という大変重要な形でICCOPT 2016に貢献していただいた。

また、線の引いた下にした3名は、開催が近くなってから急遽お手伝いをお願いした先生たちである。3名とも快くメンバーに入ることを承諾し、積極的に手伝ってくれた。

田中先生にはStudent Socialの指揮をお願いした。これについては田中先生から詳しい報告があるはずであるが、かなり楽しい集まりになったと聞いている。

Lourenço先生には、間際になってブックレットの仕事のお手伝い、会場のお手伝いなど、様々なことをお願いした。

中務先生には、ICCOPT開催の前の週に、突然Opening Ceremonyの司会をお願いした。

7月末にモンゴルで開催された国際会議に私が出席したとき、Opening Ceremonyでプロの司会者が司会をしていた。ビシッと決めた服装で、流暢な英語で司会をするのがとてもよい印象だったのである。もともとまあ誰かがやればいだろうと思っていたのだが、それで気が変わり、帰国してから、誰かいい人はいないかと探した末に中務先生にたどり着いた。中務先生にはスーツをビシッと決め、本場仕込みの流暢な英語で司会していただいた。国際会議のOpeningとして恥ずかしくない、プロレベルの司会だったと思う⁷。

最初に少し書いたように、私がICCOPTに関わろうと決心したとき、これを機に多くの日本の若い人たちに連続最適化に興味をもってもらい、今後10年20年とこの分野を盛り上げていってもらいたい、という思いがあった。それが達成されたかどうかはすぐにはわからない。

誰か自分が退職するころ、「ICCOPT 2016はその後の日本における最適化の研究に大きな役割を果たした」というような記事を書いてくれるだろうか……。

参考文献

- [1] 今野浩, “OR40年,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, 50(4), pp. 285-287, 2005.
- [2] ICCOPT 2016 Tokyo ウェブページ, <http://www.iccopt2016.tokyo/> (2016.10.11 閲覧)

⁷ ただ、先生ご自身が開始5分前まで会場に現れなかったのでかなり焦った。万一来なかったら、と思って代役を準備していたが、スーツを着ている人がいなくて困っていた。